

お品書き

【その巻】CODEレター VOL.27  
【その式】スマトラ沖地震津波報告

以上

**CODE**  
Letter

2006.1.22 VOL. 27

(特活)CODE海外災害援助市民センター発行  
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10  
TEL:078-578-7744 FAX:078-574-0702  
e-mail: info@code-jp.org URL: http://www.code-jp.org/  
郵便振替: 00930-0-330579

## 災害と人権 - いのちの尊さ

芹田健太郎  
CODE代表理事・  
神戸大学名誉教授・愛知学院大学教授

1月17日は、毎年、過ぎた1年を振り返り、次の1年への決意を語る日としたい。国内だけでも2004年10月に兵庫や京都に甚大な被害をもたらした台風23号、3日後の新潟県中越地震、2005年3月には福岡西部沖地震があった。国外では2004年12月のスマトラ沖地震・大津波、2005年8月の米南部を襲った超大型ハリケーン、最近のパキスタン地震など、災害が多発している。毎年これらを正確に記録にとどめたい。被害と救援の状況、そして何が足りず、何が求められているのか、何をすればいいのか。そもそも災害に対する備えは万全であったのか。「いのち」というものに対してもっと鋭敏でなければならない。国際社会でそうあるように、日本でも生命に対する権利を十分に見つめ、議論を深めなければならない。

人権は人間の尊厳に基づく。人は生まれながらにして平等であり、生命に対する権利をもっている。生命権は人権の出発点であり、「至高の権利」である。日本国憲法は個人の尊重をうたい、生命、自由、幸福追求の権利を国政の上で「最大の尊重を必要とする」と定め、国際人権規約も「すべての人は生命に対する権利をもつ」と規定している。

災害には天災と呼ばれる自然災害だけでなく、人が作り出す人的災害もある。人災の最たるものが戦争である。自然災害に続いて起きる、いわゆる二次災害も、人の配慮が足りず起きるもので、神戸でも見られたように、また、パキスタンの被災地などで見られる寒冷対応の不備なども、人災と言える。天災も人災も多発地域は途上国である。

「災害と人権」を語るとき、災害から生き残った人たち、生きている人たちの人権のことを語る。先ず何よりも、生きている人たちの生命権を保障しなければならない。そして健

康権・居住権が保障されなければならない。災害時にもっともひどい形で災害の影響を受けるのは日常からの社会的弱者だからである。しかし、それだけではない。イランのバムの子どもたちは「しあわせ運べるように」をイラン語で歌っている。大人たちは音楽を聴き、語り合った。避難所で、仮設で、瓦礫の残る公園・広場で。かけがえのない一人ひとりの生が息づいている。人を全体として捉えなければならない。

人はなぜと尊いのだろうか。ひとりの人は、遠い祖先からつながってきて、今、ここに、存在している。そして、食物連鎖のことを考えてみよう。人は食物連鎖の頂点にある。つまり、生きとし生けるものすべてから「いのち」を貰い、生かされている。ひとりの人の生命が無くなることは、その「ひとりの人」につながる、その人を養った生き物たちの「いのち」すべてが失われることである。「ひとり」はその重みをもっている。だから尊い。災害でいのちを失った人たちは、なぜいのちを失わなければならなかったのか。防げなかったのか。われわれに抜かりはなかったのか。予防防災の議論は十分だろうか。

天災にしても戦争にしても防ぐことはできる。われわれが、一人ひとりのいのちと、単なる食材としてではなく、そのひとりを支える生き物のいのちの大切さを、心に、肝に、銘じていれば、できる。部分的に、たこつぼ的に深めるのではなく、あらゆる局面で、全体としての「ひと」を見よう。環境問題も、生命倫理のことも、胎児のことも・・・「世界よりも重い」といわれる人の「いのち」を総体として捉えることが急務である。

## スタッフ濱田久紀のスリランカ派遣のお知らせ

1月20日から防災教育プログラムのために、濱田久紀がスリランカに1年間駐在することになりました。濱田は1年間国連ボランティアとして、スリランカ南部で現地パートナーと一緒に防災教育の普及に務めます。以下に挨拶と今後の抱負を申し上げます。

予定していた時期より遅れてしまいましたが、1月20日から国連ボランティアとして、スリランカ南部のマータラ、ゴールでCODEの防災教育支援を実施するために、1年間スリランカに駐在することとなりました。これまでご支援、ご協力いただきました皆さま、ありがとうございます。

私は11年前の阪神淡路大震災の当時、神戸市東灘区に住んでいました。私自身の被災体験についてはこれまであまり語らずに、できるだけ神戸から離れて過ごしてきましたが、震災から10年以上が経ち、徐々に伝えたいという思いが高まってきました。スリラン

カでは、押しつけではなく、被災者が主体的に関わりながら、被災者同士が支え合っていく仕組みをサポートしていきたいと考えています。今後ともよろしく願います。



(2005年12月11日 スリランカ・マータラ)

## シンポジウム「世界の1年を振り返って次の1年へ」

1月8日にCODEが主催するシンポジウム「世界の1年を振り返って次の1年へ」がJICA兵庫で開かれ、約90人の市民が参加しました。

記念講演では、芹田CODE代表理事が、「災害と人権」をテーマに講演し、その後のシンポジウムでは、井戸兵庫県知事知事、JICA国際緊急援助隊事務局長である浅野さん、ピースウィンズ・ジャパン統括責任者である大西さんをパネリストに迎えました。それぞれの立場からの災害救援のあり方、それぞれが持つ経験や資源を生かして支援する仕組みの必要性について議論されました。



(2006年1月8日 JICA兵庫)

## 活動記録 11/1~1/20

- 11月12日 第4回 国際協力セミナー「企業と国際協力」
- 11月15日 アフガニスタン報告<きりり連合>(村井)

- 11月19日 第5回 国際協力セミナー「高校生と国際協力」  
全日本仏教婦人連盟大会に出席(村井)
  - 11月23日 ボランティアの日・CODEレター発行(飯塚・斉藤)
  - 11月24日 防災分野課題別支援委員会 JICAテレビ会議<スリランカJICA・東京JICA・神戸の三者>(村井)
  - 11月25日~12月5日 第1次パキスタン派遣(吉橋・岡本)
  - 11月25日 防災士研修<伊予>(村井)
  - 11月26日 第1回 寺子屋セミナー「予防防災」(室崎)
  - 11月30日 堺女性大学主催 パキスタン報告(飯塚)
  - 12月1日 第6回 国際協力セミナー「主婦と国際協力」
  - 12月2日~1月4日 (JICAミッション)スリランカ派遣(飯塚・濱田)
  - 12月6日 JAL社内向け パキスタン報告(吉橋・岡本)
  - 12月7日 「アンデス災害医療マネジメント研修」で講演(村井)
  - 12月10日 第2回 寺子屋セミナー「予防防災」(室崎)  
防災士研修<大阪>(村井)
  - 12月13日 ラジオ関西出演 パキスタン報告(吉橋・岡本)  
JICA-NET<スリランカ支援>(村井)
  - 12月14日 第7回 国際協力セミナー「ボランティアと国際協力」  
神戸女学院大学 パキスタン報告(吉橋・岡本)  
兵庫高校ボランティアサークル パキスタン報告(吉橋・岡本)
  - 12月15日 パキスタン報告会 YMCA(吉橋・岡本)
  - 12月17日 第3回 寺子屋セミナー「予防防災」(室崎)  
12月度理事会
  - 12月22日~28日 スリランカ派遣(村井)
  - 12月25日 FM COCORO出演 スリランカ報告(飯塚)
  - 1月6日 FMわいわい出演 スリランカ報告(飯塚)
  - 1月7日 神戸YMCA、日本基督教団兵庫教区・長田センター共催 パキスタン地震募金活動
  - 1月8日 シンポジウム「世界の1年を振り返って次の1年へ」  
(芹田)
  - 1月17日 ひょうご安全の日 舞子高校「1.17震災メモリアル」  
海外の災害地報告(飯塚)
  - 1月18日 UNCRD等共催 防災シンポジウム2006(芹田・室崎・村井)
  - 1月20日 世界災害語り継ぎネットワーク設立記念フォーラム
  - 1月20日~ (UNVスタッフとして)スリランカ派遣(濱田)
- \*多くの団体がパキスタン地震の募金活動をしてくださいましたが、CODEのスタッフが参加した分のみを掲載しております。

## ありがとうございます 11/10~1/20

### 会員・寄付者ご芳名(以下順不同・敬称略)

#### 一般寄付

個人: 芹田健太郎、小谷美智子、原岡富美子、斉藤茂樹、岡本芳子、中谷勇一、森下和子、戎綾子(以上兵庫)、柴原園子(大阪)、三島宣彦(東京)

団体: 国際保健支援会(長野)

#### 会員

賛助会員 個人: 原岡富美子、岡本芳子、濱田久紀、宇都幸子、平澤紅露、水野浩重、遠周龍子、岩国正次、郡あや子(以上兵庫)、雄山真弓(滋賀)、細谷祐司(奈良)、鶴飼愛子(静岡)、不破雅実(東京)、町田憲治・佳菜子(新潟)

## CODE のスリランカにおける復興支援活動

CODE 海外災害援助市民センター

飯塚明子

### 1. はじめに

スマトラ沖地震津波被害に対する復興支援活動におきましては、これまでに日本国内の団体・個人の皆様から温かいご支援をいただいております。スマトラ沖地震津波から 12 月 26 日で 1 年を迎えるにあたり、CODE のスリランカにおける復興支援活動をここにまとめて報告いたします。

### 2. スリランカの被災状況

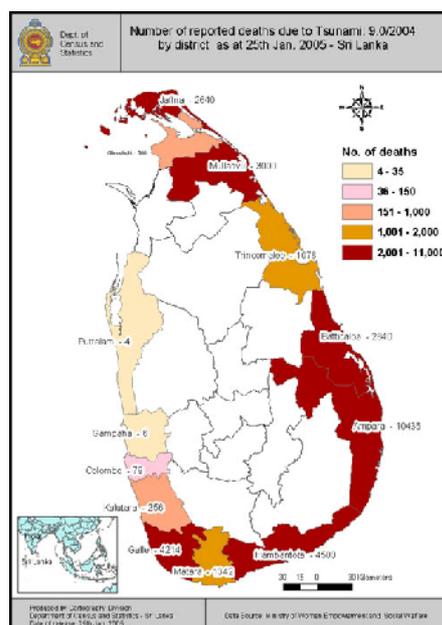
2004 年 12 月 26 日に、インドネシアのスマトラ沖でマグニチュード 9.0 の地震が発生。津波は最大 15 メートルになり、12 ヶ国が津波の被害を受けました。死者数は、判明している分だけで、インドネシアで 16 万 3800 人、スリランカで 3 万 5400 人、インドで 1 万 6400 人、タイで 8300 人となっています。

(情報源 毎日新聞 2005 年 12 月 23 日 東京朝刊)

スリランカでは、大津波による死者が 3 万 5000 人を超え、7 万 5000 世帯が住まいを失いました。

右の地図によると、島のほとんどの海岸線が津波の被害に遭い、特に色の濃い地域で大きな被害が出ました。特に被害が大きかったのは東部と北部で、この地域はスリランカの少数民族であるタミル・イーラム解放の虎 (LTTE) が影響力を持っている地域で、津波以前から貧しく開発が遅れていました。被災者の多くは貧しい漁民で、特に北部では 20 年間の内戦と津波で二重の苦しみを受けました。

南部でも、漁村が被災し、ホテルやレストランなどのリゾート施設も多く被災しました。



(情報源 スリランカ政府

2005 年 1 月 25 日)

### 3. 復興支援活動について

CODE は現場のニーズと阪神・淡路大震災以降の国内外の災害救援の経験を生かし、スリランカで3つの支援 防災教育 幼稚園・保育園再建支援 漁業支援に取り組みました。今後の中長期的な支援計画を踏まえつつ、これまで1年間の支援内容を以下に報告します。

#### 防災教育

スリランカ YMCA を現地パートナーとして、スリランカで最も被害が大きかった東海岸のアンパラ県にある、カルムナイ YMCA で津波防災教育プログラムを50人程の子どもたちを対象に6月22日に行う。日本に古くからある津波の話である「稲むらの火」<sup>1</sup>や「なまず大明神」を被災した子どもたちが劇にして演じ、さらに子どもたちが自主制作した劇の発表があった。



プログラムの様子(6/22)

自主制作の劇は、津波が来てもなかなか避難しづらい住民を例に取って、どのように避難すればいいのかという内容を教える内容。子どもたちが脚本から役柄まですべて自分たちで制作し、ユーモアを交えていきいきと演じる姿を見ると、ただ日本の津波の話を紹介するだけではなく、日本の物語を事例として、どのように自分たちの生活の中で災害の備えについて考えることができるかが大切であると改めて実感。このプログラムをとおして、子どもたちは津波にどのように対応すべきかということ、自分たちの言葉で表現し、他の人に伝えることができた。子どもたちに感想を聞くと、スリランカでは演劇や踊りはとても人気があるが、防災に関する劇は初めてで、面白くて勉強になったとのこと。



いきいきと演じる子どもたち(6/22)

今後、このような防災教育を南部のマータラで行う予定である。12月10日にマータラ YMCA で、今後の防災教育プログラムを企画運営するにあたって、オリエンテーションを実施した。現地のボランティアや被災者30人ほどを対象に、神戸での防災教育の取り組み

<sup>1</sup> 「稲むらの火」の物語は、和歌山県のある村で、一人の老人が地震後、津波がくると予感し、収穫した大切な稲むらに火を放ち、多くの村人を救ったという物語。昭和初期に日本の小学校に掲載されたこともあり、津波の教訓を伝える物語として、現在も語り継がれている。

2、日本の防災教育の事例<sup>3</sup>や CODE がこれまでモルディブとインドネシアで行った防災教育を紹介。このオリエンテーションはとても好評で、スリランカの人から防災の歌を現地語にしたいとか、自分がいる地域で防災教育をしてほしいとか、さまざまな自発的な提案がなされ、今後1年間のプログラム計画に生かしていきたい。



「まけないぞう」の紹介(12/10)

津波発生から1年が経ち、これまで防災教育は二の次にされがちであった。しかし、これからは防災教育を通して津波の経験を語り継いでいくこと、津波の教訓を生かしていくことへの取り組みが大切である。CODEはスタッフを1年間マータラに派遣し防災教育の普及に本格的に取り組む。子どもたちが主体的に防災に取り組めるようなプログラムを現地のスタッフと一緒に考えてい



オリエンテーションの様子(12/10)

きたい。そうすることによって、子どもたちの心のケアの一端も担っていけると考えている。

### 他国における防災教育プログラムの実施

- ・ **タイ** 社団法人シャンティ国際ボランティア会(SVA)を通して、「稲村の火」の絵本を2005年12月頃に絵本で出版する予定。
- ・ **モルディブ** JICAと愛知県知多郡美浜町布土小学校と協力し、7月にフォナドー島の学校とコミュニティを対象に、防災の歌のパフォーマンスなど防災教育の試行を実施した。
- ・ **インドネシア** セーブ・ザ・チルドレン国際アライアンスチーム(ISVC)の要請のもと、8月にインドネシアのニアス島で日本の防災教育の取り組みを紹介したり、防災マップ作りのワークショップを行ったりした。

<sup>2</sup> 阪神淡路大震災の復興応援歌「しあわせ運べるように」(明親小学校音楽教諭臼井真さん作詞)の紹介や、神戸の仮設住宅で生まれたクラフト「まけないぞう」の紹介。

<sup>3</sup> 愛知県知多郡美浜町布土小学校の防災の取り組みを紹介。

## 幼稚園・保育園再建支援<sup>4</sup>

幼稚園・保育園再建支援は、スリランカの現地 NGO である TRRFCW (子どもと女性のための津波復興支援財団) と連携して取り組んでいる。現在のところ、スリランカで以下の5つの幼稚園を支援している。

### ジャフナ

地名：アラリサウス (Arali South)  
対象：園児 20~30 人 (タミル人)  
進捗：9 月着工  
その他：アラリサウスは、紛争と津波の二重の被害を受けた漁村。幼稚園は津波で流された。

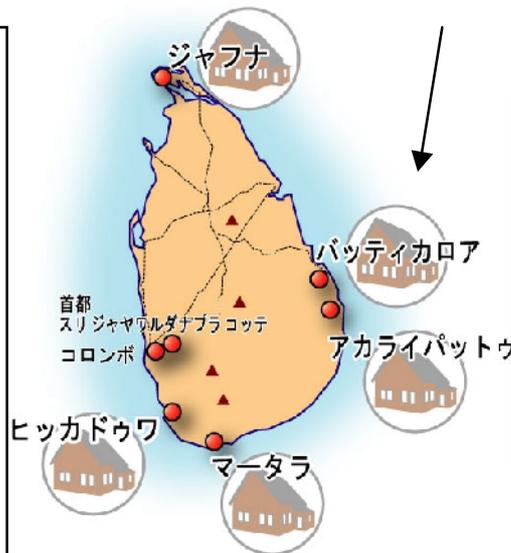
### パッティカロア

地名：カッタクディ (Kattankudi)  
土地：先生の土地  
対象：園児 40 人以上、先生 2 人 (イスラム人)  
その他：以前にあった幼稚園は津波で全壊、現在は仮設の小屋で幼稚園を再開している。

### ヒッカドゥワ

(下写真 12/11)

地名：ヒッカドゥワ (Hikkaduwa)  
土地：幼稚園の校長先生の家族が所有  
対象：園児 70 人、先生 3 人 (シンハラ人)  
進捗：11 月着工  
その他：現在はお寺の厚意に頼りながら、一時的に講堂で授業を再開している。



### アンバラ

地名：アカライパットゥ (Akkarapatthu)  
土地：教会より提供  
対象：園児 20 人~30 人 (タミル人)  
その他：バッファーズンの関係で、まだ永住先が決まらず、現在仮設住宅の幼稚園に通っている。

### マータラ (右写真 12/11)

地名：マータラ (Matara)  
土地：個人より提供  
対象：園児 27 人、先生 1 人 (シンハラ人)  
進捗：12 月下旬完成予定  
その他：午前中は 3 歳から 5 歳の子どもたちが勉強し、同じ場所で夕方は小中学生が語学の授業等を受ける予定。



<sup>4</sup> 学校には 3 歳から 5 歳くらいの子供が通い、その規模によって生徒と先生の数が違う。1 軒の学校を建てるのに、大体 80 万円くらいかかる。ジャフナの幼稚園は「神戸私立保育園連盟」様、マータラの幼稚園は「長崎県県民運動実行委員会」様、ヒッカドゥワは「お天気や事務局ウエザーマップ」様からご支援をいただいている。

今後はそれぞれの復興状況に合わせて、幼稚園が再建される予定。それぞれの幼稚園は、地元の先生や子どもたち、その父兄によって運営される。今後可能なら防災教育のプログラムも取り入れて行きたい。

スリランカでは、主にシンハラ人（約7割）やタミル人（約2割）、ムーア人（約1割）の各民族が共存しており、これまで20年以上民族間で激しく対立してきた歴史がある。津波の支援の分配で新たな対立を生み出すことがないように、CODE はそれぞれの民族にバランスよく支援することの大切さを現地パートナーと認識し、左ページの地図のとおり、民族的、文化的、地理的にも差別なく幼稚園の再建をすすめてきた。

幼稚園支援のパートナーはティラクさん。彼は南部出身のシンハラ人で、幼稚園を再建するために20年ぶりに北部のジャフナに入った。彼のようなシンハラ人が、タミル人支配地域であるジャフナに幼稚園再建のために訪れたことは、タミル人の被災者から大きな歓迎を受けたと言う。CODE の幼稚園再建支援は小規模な幼稚園の再建だが、1軒の幼稚園から広がる子どもたちの将来への可能性、スリランカの平和への道すじは、幼稚園1軒の価値よりもはるかに大きな意味がある。ジャフナの幼稚園はタミル人、シンハラ人の平和構築へと導いて行ってほしい。



幼稚園の着工式（ジャフナ・11/10）

5軒の幼稚園には、それぞれ異なる事情背景がある。民族、地理、言語上の違いだけではなく、被害の程度や復興の早さも違えば、復興課題も違う。ティラクさんによると、幼稚園再建のニーズはまだまだ高いので、幼稚園1軒単位で支援してくれる日本の団体、個人を募りつつ、今計画している5軒の幼稚園の再建過程を見守って行きたい。



建設中の幼稚園の前で先生と生徒  
（マータラ・12/11）

## 漁業支援

スリランカの UFFC（漁師と漁業労働者の協同組合）との連携のもと、漁業組合の支援を行っている。漁業組合の支援は次に挙げるスリランカの2つの地域で実施している。

### ・ クダワラ漁村（ハンバントタ地区）

クダワラ漁村はスリランカ南部海岸のハンバントタ地区に位置し、1200 所帯（約 8000 人）が住んでいる。津波で 450 所帯が全壊し、200 人が亡くなった。ほとんどの住民がボートや漁業道具を失うと同時に仕事も失った。



被災したクダワラ漁村（7/8）

地元のリーダーであるジャヤンタさんを中心に漁業協同組合（会員 150 人）を設立し、CODE は以下の費用を協同組合に支援した。

- ・ One-day boat<sup>5</sup> 1 隻
- ・ 漁具（ランプ等）61 人分
- ・ 漁師の家族の女性グループ支援プロジェクト
- ・ 津波対策のワークショップにかかる費用



組合委員会のミーティング（7/8）

最も高価なボート（One-day boat）は漁業組合の持ち物になるので、組合の中でボートを共有しながら管理する。そのボートを使って取った魚の売り上げの3分の1を協同組合に、3分の2を漁師に配分する。さらにボートには限られた数の漁師しか乗れないので、その他の組合員は小規模漁業（海岸近くで、小さな船で網や仕掛けを使って漁をする）に従事し、毎月少額のお金を協同組合に寄付する。そして、協同組合はそれらのお金を集めて、組合員と話し合いながら貯まったお金をどのように使うか決めていく。具体的に提案された使い道は、新たなボートを買う、コミュニティの図書館に英語の辞書を購入する、釣用のランプや漁具を組合員にマイクロクレジットの手法で提供する等。協同組合にはルールを設け、経験のあるジャヤンタさんが組合員を組織し、組合員の意見をくみ取りながら協議し決定したことを委員会に提案する。委員会は代表、副代表、書記、ジャヤンタさんから成り、規約に沿って物事を決定する。

<sup>5</sup> One-day boat はエンジンがついている4人乗りの船で、沖合の深海まで出ることができる。通常30センチ～1メートルくらいのマグロなどの魚を獲る。4人の乗組員のうち1人は skipper と呼ばれるリーダーで漁獲の指示を行う。

## ・ サムドラガマ漁村（トリンコメリ地区）

サムドラガマ漁村はスリランカ東部海岸のトリンコメリ地区に位置し、400 所帯が住んでいる。津波で全ての家屋が全壊し、約 75 人が亡くなった。住民は家族や家、漁業の道具を全て失った。生き残った住民の中にはトラウマの症状がある人もいる。

サムドラガマの漁業共同組合（会員 168 名）に対して、CODE は以下の支援を行った。

- ・ Fiber glass boat<sup>6</sup> 1 隻
- ・ 漁具（ランプ）168 人分
- ・ 漁師の家族の女性グループ支援プロジェクト
- ・ 津波対策のワークショップにかかる費用



津波で大きな被害を被った漁師達が 1 日でも早く仕事を再開することは、被災地の復興における最優先課題の 1 つである。もともと漁業労働者は社会的に虐げられている人々が多く、津波後その状況はますます悪化した。そのような状況を受けて、CODE は UFFC と連携して被災地域で漁業協同組合を設立することになった。しかし、国際 NGO の支援により船や網が大量に無料配布され、実際に使われずに放置されている船もある。一方で支援漬けにされた被災者からはあれが欲しい、これが欲しいというような声しか聞こえない。このような状況で、被災者の自立を支援することは大変困難である。無償で必要以上に船や網を提供することの弊害は、そのプロセスに被災者の意思や主体性が入らないことにある。CODE は協同組合の形式を取り入れ、あくまで被災者の自立を促し、地元の人が主体的に復興に携わることができるようにしていきたい。クダワラ漁村・サムドラガマ漁村では、漁業組合が設立され、おおまかな規約が決定したが、まだ始まったばかりでこれからも繰り返し協議したり、調整したりしながら組合員自身が協同組合を運営していく過程をサポートしていきたい。

<sup>6</sup> Fiber glass boat は、1 人～2 人が乗る船で、沖合まで行かずに陸近くで 20 センチ～30 センチくらいの小さな魚を獲る。

#### 4. 1年間の経緯

##### 支援活動

2004年 12月 26日	スマトラ沖地震津波発生
2005年 1月 1日～6日	スリランカ派遣：緊急段階で最も被害が大きかった東海岸に入り、被災地の状況とニーズ調査（村井、斉藤）
2月 25日～3月 4日	スリランカ派遣：引き続き、東海岸に入り、中長期的な復興支援プロジェクトを計画。（斉藤、飯塚）
4月 6日～18日	タイ・スリランカ派遣：タイで SVA と絵本出版について調整・スリランカで防災教育、幼稚園支援、漁業支援プロジェクトを立案。（村井、飯塚）
4月 21日～5月 9日	インド派遣：インド、アンダマン諸島で被災者自身が住宅建設に携わる SEEDS の活動を支援（村井、斉藤）
6月 19日～7月 1日	JICA のスリランカ緊急開発調査に参加（飯塚）
7月 5日～14日	インド・スリランカ派遣：インドで NGO アジア防災ネットワークの会議に参加・スリランカでプロジェクト調整（斉藤）
7月 22日～29日	JICA のモルディブ緊急開発調査に参加（濱田）
8月 1日～11日	スリランカ派遣：幼稚園再建支援、漁業組合支援のプロジェクト調整（野崎理事、飯塚）
8月 22日～29日	ISVC の要請を受け、インドネシアのニアス島で防災教育を実施（村井、濱田）
9月 22日～26日	タイのクラビー県で、津波アジア国際会議に参加（村井、飯塚）
12月 2日～28日	JICA の防災教育プログラムの調整（飯塚、濱田、村井）



津波発生後の様子  
(2005年1月)

## 報告活動

2005年1月4日	合同報告会 JICA兵庫(村井)
2月26日	活動報告 みのる会(村井)
2月28日	活動報告 きらり連合(村井)、岸和田ちいさな友の会(村井)
3月6日	活動報告 神戸YMCA三宮会館(飯塚)
3月9日	活動報告 兵庫県立舞子高等学校(飯塚)
3月15日	青年海外協力隊向けの報告 JICA兵庫(飯塚)
3月16日	活動報告 かつやま子どもの村中学(飯塚)
3月18日	活動報告 コープこうべ(村井)
3月21日	シンポジウム 日本NPO学会(村井)
4月10日	活動報告 神大COE(斉藤)
4月13日	活動報告 宝塚Y'sメンズクラブ(斉藤)
4月27日	活動報告 六甲アイランド高校(飯塚)
6月29日	活動報告 堺女性センター
7月9日	活動報告 岸和田小さな友の会(村井)、立命館大学ボランティアフェスタ(斉藤)
8月28日	FMCOOLO On the Move 出演(斉藤、飯塚)
9月4日	活動報告 国際理解講座 姫路市国際交流センター(飯塚)
10月1日	シンポジウム IMADR-JC(村井)
11月4日	シンポジウム 日本生協連(飯塚)
11月11日	活動報告 わーすカフェ(飯塚)
12月13日	JICA ネット ビデオ会議セミナー(村井)
12月25日	FMCOOLO On the Move 出演(飯塚)

## 5. 最後に

最後になりましたが、CODE は一般市民の皆様の貴重なご寄付によって海外でのプロジェクトを行っています。阪神淡路大震災の経験をもとに、日本で支援をしてくださっているみなさま1人ひとりの気持ちを大切にしながら、プロジェクトがスマトラ沖地震津波の被災者の復興につながるように、今後とも支援していきます。CODE のプロジェクトに関する情報は、主にホームページ(<http://www.code-jp.org/>)、メーリングリスト、CODE Letter(会報誌)がありますので、ぜひご利用ください。また、ご希望がありましたら、可能な限りスタッフがみなさまのところに出かけて直接お話しして、被災地と日本のみなさまの心をつなぐ糸口になればと考えています。ぜひお気軽に事務局までお申しつけください。(TEL:078-578-7744 FAX:078-574-0702 E-mail:[info@code-jp.org](mailto:info@code-jp.org))

今後ともご指導、ご支援の程、よろしくお願いたします。

## ～編集後記～

スマトラ沖で発生した大地震、大津波から1年。その間に福岡沖での地震、西日本の水害、アメリカや中南米のハリケーン、パキスタン北東部の地震など国内外で大きな災害が発生しました。自然災害を防ぐことはできませんが、自然災害の被害を軽減することはできます。災害の復興支援は、通常災害が発生してから始まります。しかし、災害後の復興支援をすると同時に、将来起こりうる災害の被害を軽減するような支援も必要になってきます。そのためには、被災地に災害前から存在していた課題を踏まえて支援をすることや、災害を語り継いだり、災害に備えたりする取り組みを復興課程に組み込んでいくことが大切です。

なぜスマトラ沖で発生した地震がスリランカでこれだけ大きな被害をもたらしたかという理由を再び考えてみました。9割以上の方が津波を知らなかったスリランカでは、地震の数時間後に来た津波から3万人以上の人々が亡くなったのです。今後の支援を考えた際に、防災意識向上への取り組みは欠かせません。

それと同時に、なぜ紛争が激化したか、スリランカに災害前から顕在していた民族問題についても再び考えてみました。スリランカは2002年の停戦合意まで20年に及ぶ激しい民族紛争の経験した国です。植民地政策やスリランカ政府による差別的な政策が2つの民族の対立を制度化し、利権を保持する権力者による誤ったリーダーシップで人々の不信感や被害者意識が増大したのです。

一方で、津波直後はシンハラ人とタミル人が助け合う、(スリランカ人によると)ミラクル(奇跡)が起こったという事実。残念ながらミラクルは長く続かず、支援の分配方法やそれぞれの復興課程、大統領選挙結果の不満から、それぞれの民族による暗殺や地雷攻撃が発生し、停戦合意を崩壊させるかもしれないという懸念が広がっている現在。一つの民族を支援することが、他の民族の憎しみにつながる可能性があること、支援を通しての外部の文化や宗教が現地に入ることにに対する警戒心など、支援することの大変さを学びました。支援する側にとっては様々な背景を考慮した上でバランスの取れた支援が必要になってきます。

ご支援いただいた皆さまの思いや希望を持って被災地に行き、スリランカの復興支援に携わる経験は、私にとって初めてでとまどうことが多くありました。発生から1年が経ち、緊急段階から復旧そして、復興段階にあるスリランカで、津波の被害が拡大した原因、紛争の課題をもう一度深く考え、今後の支援に生かしていきたいと考えています。